モーツァルト巡礼ーその 13

K.518　水谷康男

K364 は、 ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲　変ホ長調です。1780 年、ザルツブルクにおける作と思われていましたが、今では 1779 年の作で K320d ともされています。一応 交響曲として考えられるのですが、実際には、オーケストラを伴奏とする二重協奏曲です。管弦楽の編成は、Ob,Hr 各 2 本、Vn2 部、Va2 部、Vc・Cb よりなり、 Ⅰ:アレグロ・マエストーソ、Ⅱ:アンダンテ、Ⅲ:プレストの 3 つの楽章の、30 分程の曲です。今久しぶりに聴いていますが、素晴らしい傑作で、弦楽器好きにはとても貴重な名曲です。

右上の CD は 五嶋みどり Vn、今井信子 Va、クリストフ・エッシェンバッハ Con、北ドイツ放送交響楽団の 2000 年の録音、左はフランツヨーゼフ・マイアーVn、ハインツ＝オットー・グラーフ Va、コレギウム・アウレウム合奏団演奏の 1978 年録音の LP です。本全集の演奏と 3 回も聴いちゃいました。それぞれの良さを楽しむという至上の音楽鑑賞です。

K365 は、2 台のピアノのための協奏曲（ピアノ協奏曲 第 10 番） 変ホ長調 です。1777 年から 1779 年始めにかけての 1 年半にわたるマンハイム・パリ旅行から失意のうちに（母の死、アロイジア・ウェーバーとの失恋、ザルツブルク以外での宮廷音楽家になれず）故郷ザルツブルクに帰ってきたころの作品とされています。この旅行での苦い人生体験によって、音楽的表現の幅を広げ、内面的な深さを加えるなど、一段と成長するのであり、モーツァルトにとって唯一の 2 台のピアノのための協奏曲で、 姉ナンネルと一緒に演奏するために書かれた思われます。 2 台の独奏ピアノを支える管弦楽は、Ob・Fg・Hr 各 2 本の管楽器と Vn 二部、Va、Vc・Cb の弦楽器群の編成で演奏され、Ⅰ:アレグロ、Ⅱ:アンダンテ、Ⅲ:ロンド−アレグロの 3 楽章の演奏時間 24 分の曲で、前曲に勝るとも劣らぬ傑作です。

K366 は、オペラ・セリア「クレタの王　イドメネオ」で、続く K367 は、「イドメネオ」へのバレエ音楽　です。

K366 オペラ・セリア「クレタの王　イドメネオ」は、1780 年秋からザルツブルクで作曲に取り掛かり、1781 年に 1 月にミュンヘンで完成し、1 月 29 日にミュンヘンで初演されました。モーツァルトのアリアは、歌手たちの声と技量に合わせて作曲するため、最後の仕上げは初演するミュンヘンでなされました。習作的な少年時代の作品から数えて 13 番目のオペラとなりますが、芸術的には最初の画期的な愛と犠牲を主題にしたオペラセリアの名作です。

楽器編成は Picc,Fl2,Ob2,Cl2,Fg2,Hr4,Trp2,Tbn3,Timp,Vn2 部,Va,Vc・Cb,通奏低音よりなり、声楽陣は Ten3,Sop3,Bass　合唱(Sop2 部,Alt2 部,Ten,Bass)で、全 3 幕延べ3時間ほどの本格的な編成の画期的作品です。特に3幕での四重唱は素晴らしいものです。さらに劇中や、終演後に続けて演奏されたり、オペラとは独立して演奏もされることのあるバレエ音楽が K366 「イドメネオのバレエ音楽」として、一つの作品となっているのです。

この、「イドメネオ」へのバレエ音楽　K367 は、シャコンヌ、パ・スール、パスピエ、ガヴォット、パッサカリアの 5 曲よりなる、演奏時間 25 分程の作品です。

実際に手元にある映像で、鑑賞すると、素晴らしく劇的な音楽に、これが 24 歳の作品かと、驚くばかりです。（私の観た演奏は、

① 2005 年 12 月 7 日ミラノ・スカラ座の上演の放送を録画したもので、イドメネオ：スティーヴ・デーヴィスリム、イダマンテ：モニカ・バチュルリ、イリア：カミラ・ティリング、エレットラ：エンマ・ベル、アルバーチェ：フランチェスコ・メーリ他、ミラノ・スカラ座合唱団、同管弦楽団、指揮:ダニエル・ハーディング、演出：リュック・ボンディー

② 2017年 3 月25日のメトロポリタン・オペラ・ライブ放送録画で、イドメネオ：マシュー・ポレンザーニ、イダマンテ：アリス・クート、イリア：ネイディーン・シエラ、エレットラ：エリザ・ヴァン・デン・ヒーヴァー、アルバーチェ：アラン・オピエ、他、メトロポリタン歌劇場合唱団、同管弦楽団、指揮:ジェイムズ・レヴァイン、演出：ジャン-ピエール・ポネルという面々で、二つとも、その素晴らしい演奏に圧倒されました。

続く 2 曲は、いずれも 1781 年に作曲された　レシタティーボとソプラノのためのアリアです。1781 年「イドメネオ」の初演のために滞在していたミュンヘンの二人の女性歌手に捧げた作品で、

K368 は、「彼女があなたに何をした、お、星よ」と「岸は近いと望んでいた」

K369 は、「あわれな私、ここはどこ！」と「あ、これを語るのは、私ではない」　です。

K370 は,オーボエ四重奏曲　ヘ長調で、同じくミュンヘンのすぐれたオーボエ奏者フリードリヒ・ラムのために 1781 年はじめに作曲されたものです。セレナード風に書かれた曲で、オーボエの特質を発揮した、穏やかで楽しいアンサンブルの作品で、聴いていてとても心地よくなります。Ⅰ：アレグロ、Ⅱ：アダージョ、Ⅲ：ロンド-アレグロの 3 楽章の演奏時間 17 分程の曲。

K371 は、ホルンと管弦楽のための　ロンド　変ホ長調です。1781 年 3 月にウィーンでライトゲープのために作曲され、4 月 8 日に初演されています。ホルンソロのパートは完全に書かれていますが、オーケストラ部は所々が残っているにすぎません。

K372 は、ヴァイオリン・ソナタ　第 31 番　変ロ長調（未完成）です。1781 年 3 月にウィーンで作曲されたものですが、提示部がまだ完全に終わらない第 65 小節で、中断されて未完成で、のちにシュタットラ―が補作して、第 31 番とされています。実際に演奏されるのは、モーツァルトが書いたとされる第 1 楽章のみで、手持ちの全集でも、別のヴァイオリン・ソナタ全集でも、第 1 楽章のみが収録されています。

K373 は、ヴァイオリンと管弦楽のためのロンド　ハ長調　です。1781 年 4 月の作といわれ、ヴァイオリン協奏曲の最終楽章といってもよいほど軽快に進む 5 分程の佳曲です。この巡礼のおかげで、こうした佳曲を聴くことができ、聴いているだけで、本当に幸せな気分になります。

K374 は、レシタティーボとソプラノのためのアリア「あ、来たれわが胸に」「天は今、あなたを私に」です。1781 年 4 月のウィーンでの作で、初演ではカストラート（男性ソプラノ）によって、管弦楽の伴奏でうたわれました。

K375 は、セレナーデ第 11 番　変ホ長調　です。1781 年 10 月にウィーンで作曲されました。管楽器のみによる傑作で、Cl,Hr,Fg（1782 年に Ob を追加）各 2 本で、現在では管楽 8 重奏として演奏されます。　Ⅰ：アレグロ・マエストーソ、Ⅱ：メヌエット、Ⅲ：アダージョ、Ⅳ：メヌエット-トリオ、Ⅴ：アレグロ　の 5 楽章よりなる演奏時間 24 分の曲です。

K376 は、ヴァイオリン・ソナタ 第 32 番 へ長調です。1781 年 11 月にウィーンの音楽出版社アルタリアから 6 曲のヴァイオリン・ソナタ（K376,K296,K377,K378, K379,K380）が。作品第 2 番として発刊され、その第 1 曲に当たります。 Ⅰ：アレグロ、Ⅱ：アンダンテ、Ⅲ：ロンドーアレグレット・グラチオーソの 3 つの楽章からなる、20 分足らずの曲です。

右は、モーツァルトのヴァイオリン・ソナタ集の手持ちの CD ①左端：サルヴァトーレ・アッカルド Vn、ブルーノ・カニーノ Pf ②中央上：桐山建史 Vn、小林道夫 Pf、③中央・右下：アンネ-ゾフィー・ムターVn、ランベルト・オーキス Pf、④右上：シモン・ゴールドベルク Vn、ラド・ルプ Pf

他には LP で、ウィリー・ボスコフスキーVn, リリー・クラウスの名盤がおすすめです。

K377 は、ヴァイオリン・ソナタ 第 33 番 へ長調です。前曲と同じく 1981 年の夏にウィーンで作曲されました。Ⅰ：アレグロ、Ⅱ：アンダンテ（テーマと 6 つの変奏で、特に第 6 変奏は優雅なシチリアーノとなっており、演奏時間は 20 分弱です。

K378 は、ヴァイオリン・ソナタ 第 34 番 変ロ長調です。作曲地と年代については、諸説あるようですが、1781 年 11 月に出版されている以上、それ以前の作であり、1779 年作説など諸説ありますが、それよりも理屈抜きにこの 6 曲の中でも、最高の仕上がりとなっており、コンサートで取り上げられることも多い。Ⅰ：アレグロ・モデラート、Ⅱ：アンダンンテ・ソステヌート・エ・カンタービレ、Ⅲ：ロンド:アレグロの 3 楽章よりなり、演奏時間 23 分。

K379 は、ヴァイオリン・ソナタ 第 35 番 ト長調です。1781 年 4 月の作曲で、ウィーンで作曲された傑作のひとつです。Ⅰ：アダージョ-アレグロ、Ⅱ：アンダンティーノ・カンタービレのテーマに 5 つの変奏曲と大きなコーダがついた全 2 楽章の傑作です。とくに第 1 楽章のアレグロはト短調で、私から見れば、数すくないト短調の傑作です。それに比べて、第 2 楽章の力みを解放した可愛らしさは、とてつもなく美しくて、聴いているだけで涙が止まらなくなります。演奏時間 22 分。

K380 は、ヴァイオリン・ソナタ 第 36 番 変ホ長調です。1781 年夏にウィーンで作曲されたもので、1781 年末に出版された 6 曲のヴァイオリン・ソナタの最後を飾る傑作です。Ⅰ：アレグロ、Ⅱ：アンダンテ・コン・モート、Ⅲ：ロンド、演奏時間 25 分。こうして改めて 6 曲のヴァイオリン・ソナタを聴くと、いかにこの時期、モーツァルトの創作力が充実していたかを思い知ります。

K381 は、4 手のためのソナタ ハ長調 です。 1781 年 ウィーンで作曲されたと思われていましたが、現在では 1772 年の春にザルツブルクで作曲されたもの と されています。Ⅰ：アレグロ、Ⅱ：アンダンテ、Ⅲ：アレグロ・モルトの 3 楽章よりなり 17 分の演奏時間です。軽快な曲で所々に聴いたような旋律が現れては消えてと親しみやすい曲で、そんな雰囲気の会場で余興として演奏されたのではないでしょうか。

K382 は、コンチェルト・ロンド ニ長調 で、1782 年 3 月 3 日に初演されています。同日、同じニ長調のピアノ協奏曲 第 5 番 K175 を演奏した時、原作の終曲の代わりにこの新作を演奏したのでした。原作の終楽章と較べると、格段に秀でた作品であり。出版社によっては、この曲を原作と入れ替えて第 3 楽章とした楽譜もあったという事です。

K383 は、ソプラノのアリア「我が感謝を受け給え」です。Fl,Ob,Fg 各 1 本と弦 4 部」(Vn2 部、Va,Vc・Cb)の編成の管弦楽に乗ってソプラノが歌う可愛らしい作品です。1782 年 4 月 10 日にウィーンでアロイジア(この時はラング夫人)のために作曲されました。

K384 は、3 幕の喜歌劇「後宮からの逃走」です。1781 年から 1782 年にかけて＝モーツァルトがウィーンに定住するようになって　最初の大作で、モーツァルトにとって、1782 年 7 月 16 日の宮廷劇場での初演が大成功となり、これによってモーツァルトが、オペラ作曲家として認められた重要な作品です。管弦楽は、Picc・Fl・Ob・Cl・Fg・Trp 各 2 本、Timp・Trg・Cymb・GC の打楽器群、弦 5 部という本格的なものです。声楽陣は、Sop2, Ten2、Bass1 他に混声合唱というものです。全 3 幕よりなる本格的オペラとなっています。

K385 は、交響曲　第 35 番　ニ長調「ハフナー」です。交響曲は、すでに　巡礼(その 5)　で取り上げておりますので、省略します。

K386 は、ピアノとオーケストラのためのコンチェルト・ロンド　イ長調　です。1782 年 10 月 19 日作曲され、美しい珠玉の作品です。本来は、ピアノ協奏曲の終楽章とするために作曲されたのではないかと思えるほどで、もしそうであったなら、もっと演奏される機会も多かったのではと、初めて耳にして思います。
管弦楽は、Ob,Hr 各 2 本に、弦 4 部の編成です。

K387 は、弦楽四重奏　第 14 番　ト長調　です。1782 年 12 月 31 日に完成したことが草稿に記入されています。言葉にできないほど、美しく流麗に始まる冒頭から、私はノックアウトされました。Ⅰ:アレグロ・ヴィヴァーチェ・アッサイ、Ⅱ:メヌエット、Ⅲ:アンダンテ・カンタービレ、Ⅳ:モルト・アレグロ　の 4 楽章よりなる演奏時間 30 分近い傑作です。

K388 は、セレナーデ　第 12 番　ハ短調　「ナハト・ムジーク」　です。1782 年 7 月にウィーンで作曲されたと思われます。哀愁に満ちた第 1 楽章アレグロ　で始まる木管 8 重奏(Ob,Cl,Hr,Fg 各 2 本)の名曲です。　Ⅰ:アレグロ、Ⅱ:アンダンテ、Ⅲ:メヌエット、Ⅳ:アレグロの 4 楽章よりなる 25 分程の曲です。

K389 は、テノールの二重唱アリア「何と心配なおののき」で、1782 年 4～5 月の作で、「後宮からの逃走」のなかで使われるように書かれたものですが、完全な楽譜は残っていないため、新全集では省かれています。またこの CD　全集にも録音されていません。

以降、モーツァルト巡礼 － その14　へと(7 月号)続きます。